

熊本市動植物園、飯田市動物園に新たな展示をつくる

若生 謙二

1. はじめに

2012年から2013年にかけて熊本市と飯田市の動物園に新たな展示が開設された。熊本市動植物園では、3月23日に「ペンギン舎」、「カピバラ舎」が、10月12日に「サル山」がオープンし、また、飯田市動物園では、2012年8月4日に「フンボルトペンギンの丘」が、同10月27日には「アンデスコンドルの岩山」が、また2013年5月3日には、「南アルプスに生きる:カモシカの岩場、シカの草地(くさち)」がオープンした。

筆者はこれまで、天王寺動物園「アフリカサバンナ」や「アジアの熱帯林」、よこはま動物園ズーラシア「チンパンジーの森」、長野市茶臼山動物園「レッサーパンダの森」などで生息環境展示の実現にとりくんできており、その成果はそれぞれ、すでに本紀要に報告してきた⁽¹⁾⁽²⁾⁽³⁾⁽⁴⁾⁽⁵⁾。これらの展示は海外の野生動物の展示であったが、今回の展示ではいずれも日本の野生動物が対象に含まれており、この展示の立案にむきあう過程で、わが国の野生動物の生息環境展示の課題のいくつかを克服することができたと考えられるので報告する。

それは三つの点で日本の動物園展示史に画期をもたらしたものと位置づけられる。第一点はニホンザルが植物を食し、また限られた空間では痛めることが多いため、展示空間での植物との共存が難しく、生息環境の再現をめざす展示は困難であるとされてきたが、その点を克服して自然主義的な新たな展示法の展開に近づいたことである。第二は、飼育されているニホンザルの実際の生息地をモデルにして環境の再現を図ることで、動物園展示を地域環境の認識の場とすることの可能性を開いたことである。

第三点は、飯田市動物園ではニホンカモシカの実際の生息

地である南アルプスを遠望できる地にあり、それらを遠景にとりこむことにより、野生動物の生息環境展示と実際の生息地をつなぐことで、動物園展示からそれが地域認識の場となる可能性を開いたことである。

本稿ではこの事業について、その設計の考え方、現地調査の様子、そして具体的に造りあげてきた設計から施工の過程について述べ、この展示の実現が日本の動物園デザインにはたす役割について述べることにしたい。

2. 熊本市動植物園の新たな展示

1) 展示の考え方

2010年11月によこはま動物園ズーラシアで大型類人猿の保護にとりくむサガシンポジウムが開催され、同園の「チンパンジーの森」の設計や造成の過程についての報告を行った。この報告を聞いておられた熊本市動植物園の本田公三副園長から熊本でも再生計画を進めているので、一度見に来てくださいというお話をいただいた。私は翌2011年の1月16日に熊本市動植物園をはじめ訪れ、同園を見学したのち、動物園ホールで職員と一般入場者に対して「動物園の生息環境展示」と題する講演を行った。

その後、計画中のフンボルトペンギン、カピバラ、ニホンザルについての展示計画案を見せていただいた。計画案ではペンギンのプールの擁壁がめだち、ニホンザルについては緑陰が少ないいわば従来型の展示であったので、ネットの上に落葉樹の樹冠をつきださせることで緑陰を配することが可能になることや盛り土で擁壁の存在感を緩和させるなどの手法をその



図1：フンボルトペンギン展示の断面図提案



図2：ニホンザル展示の断面図提案

場で述べた。

帰宅後、改良案について電話で話をしたが、図で示してほしいということであったので、ペンギンとニホンザルの展示案について平面図と断面図の概要を描いてその日のうちにメールでお送りした。

私が考えたのは、ペンギンのプールを2.5mであるとすると、地盤を1.5m掘り、反対側は逆に1.5m盛り土をした中にプールの擁壁をいれると、プールの存在感はなくなり、水面の上からと水中の位置からペンギンを観察することができるという構造であった(図1)。

ニホンザルについては、森林性であるにもかかわらず、岩山で展示され、また堀の上から見下げて眺めている状態を克服すること、さらに緑陰がない状態を解消して木陰をつくりだすことが、展示の課題であると考えていたので、これらを克服する手法を計画されているのと同じ敷地面積で考えることにした(図2)。

まず、円形の敷地に中央が2.5mの高さとなる盛り土を行い、築山をつくる。中央には地盤から5.5mの支柱をたて、周囲には3mの高さの支柱を設けて、半径約7mの円形の築山の全体をネットで覆う。これでニホンザルの隔離は行うことができる。築山の上には樹高10m以上の数本の落葉樹を植栽し、ネットに穴を設けて樹幹を通し、葉が茂る樹冠をネットの上に突き出させることで、ニホンザルが葉や枝に近づくことを妨げ、樹木をサル被害から防ぐ。築山の地面にはノシバやササ類などの地被植物を配して地面を守り、サルが地被を痛めないように倒

木や立ち枯れ木をふんだんに配する。こうすることで、観客は見上げで、さらに木陰にくらし、枝の上を動くニホンザルの姿を眺めることが可能になり、見上げで森林性を感じる展示が可能になる。

動物園の飼育担当者はニホンザルを奥山から里山に移動する関係を表示したい意向があるのだという。この展示で、円形の半分を奥山にし、反対側を里山のエリアにすれば、それは可能になる。ビューを二か所にし、奥山ビューと里山ビューを設ければ、山の上から里地にでてきた様子を展示することができる。

以上の考え方を平面図と断面図にして、その夜遅く添付メールで副園長にお送りした。この絵は翌日、担当者にまわされて検討され、この方向ですすめようということになったのであるという。

2) 相良村への現地調査

2月16日に再び、熊本市動植物園を訪れ、全員で設計の見直しの検討会を行った。その後、園内を歩いて事務所に戻ろうとしていた時に、「あの個体群は昭和40年代に球磨郡の相良村から捕獲されてきたものなんですよ。」と本田副園長が話された。車で1時間半位の距離であるということである。私は明日、現地に行こうと提案した。早速、園では整備計画の飼育担当の松本充史参事、造園担当の田尻一誠参事、建築担当の濱田康成参事が相良村に私と視察に行けるように手配をして頂いた。



図3：相良村の奥山の風景



図4：相良村の農村部の風景

翌朝、私たちは、公用車で相良村にニホンザルの生息地の現地調査にでかけることになった。相良村ではいくつかの集落を訪れた。集落では大根の食べ跡など、ニホンザルの多くの被害がみられた。昨日も群れが来たのだという。相良村の集落の耕作地の多くは、野生動物からの被害を防ぐためにネットの柵で囲われている。それは人間が柵の中で暮らしているようにもみえる。畑にはサル追いのバケツが置かれており、被害の深刻さがわかる。私たちは集落の方にお話を伺った。今日では村には高齢者が多いが、かつて若い人々が多かった頃、ニホンザルは追われると去って行ったのだという。私たちは棚田でのサル対策の様子、物置の構造、石積みの様子等を記録に残した上で、砂防ダムをこえてニホンザルの声のする山にむかった。私たちの姿にニホンザルの群れは森の奥に姿を隠した。

山はツブラジイが優占する常緑樹の森であった。急峻な傾斜地を登ると、樹木の多くは萌芽林で林床にはシダ類のみがみられた。私は海外の野生動物の展示計画案を造る際には、アフリカやインドの国立公園やその周辺の調査を行ってきたが、これは距離が近いだけで全く同じことである(図3)、(図4)。

3) 移植木を選ぶ

調査をふまえて、私たちは相良村の山と農村を展示のモデ



図5：選定したタブノキ

ルにすることにした。展示計画はモデルが決まると進めやすい。今回の計画では植栽が重要な役割をはたすことになるので、造園担当の田尻技師とともに、移植する樹木の選定にとりかかった。同園では今後の入園者数の増加に対処するために、園に隣接する敷地に駐車場を計画しており、そのためにいくつかの樹木を伐採することになる。これらの樹木を活用しない手はない。私は田尻技師とともに、移植に適した樹木を選んだ。緑陰を確保するためには、樹高10m以上の落葉高木が必要であり、これに適したエノキの高木が見つかった。あ



図6：ニホンザルの展示提案の奥山側の正面図



図7：ニホンザルの展示提案の農村側正面図

と数本の高木が必要になるが、ここでは樹形が重要になる。築山は傾斜しており、ネットはそれに並行して3m上にかけてられることになるので、この傾斜に適した枝張りの樹木を選ばなければならない。選定の結果、それにふさわしい樹形のタブノキとシイノキをみつけることができた(図5)。当初、田尻技師は私がかわった形の樹形ばかりを選ぶことに驚かれていたらしいが、理由を聞いて納得された。同様の樹形のシナサワグルミの高木もみられたので、これは農村側のエリアに配することにした。

このようにして、移植する高木が決まったので、田尻技師とともに森林側と農村側を表現する植栽種の選定にかかり、それらをもとに私は移植する樹木の形状を表した森林側と農村側の正面図を描いた(図6)(図7)。

4) 施工から完成へ

これらをもとに受託設計業者である(株)プレック研究所の玉井邦治九州事務所長らとともに実施設計図を完成させ、2012年からの工事への着手にあたり、私は(株)プレック研究所とともに施工監理に携わるようになった。

建築工事が終わり、工区の地盤が整備された2012年8月頃からフンボルトペンギンのエリアの施工に携わった。造園の担当は田尻技師から長和史技師にかわった。ペンギンのエリアでは、プールの水槽のあるエリアの横に、地上を歩くことで

きるエリアがある。ここは観客の路盤より60cm上げており、視線高に近い高さで観察できるようにしている。園内にはかつて用いられていた多くの岩があり、これらを活用しようということになった。プールの近くは擬岩で処理される予定であったが、擬岩は夏季には熱をもち暑くなるので、ここには直径約2mの平板な岩を3枚配することにした。また、園路際にもいくつかの岩を配することにした。岩の配置は、岩の表情を見ながら、即座に置き場所と向きを決めなければならない。それは岩との即断即決のたたかいである。

岩を配した後は、植栽工事がはじまることになる。植栽では、エリアの周囲を低木で囲って、周囲の人工物を遮蔽して内側はチリの沿岸部をあらわすような低木と地被の植栽を行った。遮蔽植栽では外側にヒサカキやトクワマンサクやウバメガシ等の密度の高い常緑樹を配し、内側にはプリペットなどの明るい樹葉のものを配し、沿岸の景観となじませるようにした。オリーブ、シマトネリコ、イヌコリヤナギ、ウツギ、シモツケなどを随所に配し、地被にはフックスソウ、シャガ、ユキノシタ、ヤブラン、カンズゲ、チガヤ等を用いた。地被の配置は通常、種名と平米単位での株数を記載するが、このような環境を演出する工事ではより詳細な配置計画をたてておくことが必要である。施工では株のポットと敷地を眺めながら、ある程度の群落となるような植栽を行った。

秋になり、ニホンザルの築山とネットを支える鉄骨、ビューと

なる農家の納屋の躯体が完成したので、展示景の施工監理を行うことになった。ニホンザルの施工を行ったのは、地元の(株)木上梅香園で、担当は馬場大雄氏である。私たちは、長技師と馬場氏、プレック研究所の井崎誠氏、森田緑氏らとともに、改めて現地の相良村を訪れることにした。このような事業は現地を見ておかなければ、施工のイメージがわくものではない。しかし、現地の刺激があれば、思わぬ智慧がわくものである。12月18日、私たちは相良村を訪れ、これからつくるべき森と農村の景観に向きあった。

山の上の北嶽神社には古くからサルを祀る狛犬が置かれている。サルは近年では農作物への被害をもたらしているが、かつては信仰の対象でもあった。干し大根の棹、椎茸栽培の楢木、納屋前に積む薪、納屋の農具、被害を防ぐ柵、相良村の道標等、展示に活用することのできる多くの材料を目にした。棚田の横につくる石積みは相良村から運ぶことにした。

納屋をかこむ壁面の杉板の表現には、こだわった。納屋の古びた杉板の雰囲気を出すために、薬剤で表面を焼き、さらに陰影を出すためにブラシで随所を削って深みを出すことにした。それはかつて私が建材に用いる木目印刷柄のデザイナーをしていたこだわりでもあった。このような肌理の細かさが、雰囲気をかもしだすのに大きな力を発揮する。ネットをつきだす高木は二本のタブノキ、二本のエノキとシナサワグルミである。駐車場跡からはさらにエノキやシイの巨大な数本の倒木を運んで、ニホンザルが渡れるようにした。奥山ビューの側からは反対側にある農家の納屋の建物が見えてしまう箇所があったので、急遽その間に岩を立てて遮ることにした。これらは神経をつかう仕事であった。こうした大がかりな工事を終えた後、樹冠を残してネットを張る作業があり、奥山の側の植栽と農村の棚田部分の地被の植栽に移った。奥山側ではニシキギ、ウツギ、ガマズミ等の低木の他、ヤブソテツ、ベニシダ等の他、ミヤコザサ等の地被を配し、農地側ではノシバで棚田を表し、ススキ、チガヤ、カンスゲ等の地被を配した。

相良村の現地調査をもとに、第一の奥山のビューの横には北嶽神社の狛犬をモチーフにしたサルの地蔵をおくことにした。長技師と馬場氏らは相良村と交渉して農具などの他、実

際に使われていた道標やスクールバスの停留所を展示のためにいただいてこられた。また、この地が鳥獣保護区であることから、「鳥獣保護区 相良村」の標識を入口にたてることに



図8: 地被と岩を配したフンボルトペンギンの展示 (熊本市動植物園)



図9: 相良村をモデルにした森に向かう (熊本市動植物園)



図10: 相良村奥山のニホンザル展示のビュー (熊本市動植物園)

した。

この展示では、観客は相良村に入りこみ、鳥獣保護区のこの地でまず奥山の環境でニホンザルにであい、狛猿の信仰を

知り、里山に進んで農家の納屋からニホンザルを眺めて、サルが農作物におよぼす深刻な被害の実情を知る。

施工後、7か月間の植物の養生を経て、13頭のニホンザル



図11：樹上を移動するニホンザル（熊本市動植物園）



図14：樹上のニホンザル（熊本市動植物園）



図12：森の中のニホンザル（熊本市動植物園）



図15：農家の納屋から眺めた里山の景（熊本市動植物園）



図13：枝の上を歩くニホンザル（熊本市動植物園）



図16：棚田に現れたニホンザル（熊本市動植物園）

は植物の繁茂した「サル山」に放たれた。ニホンザルは予想通り、奥山から里山の地上を円状に移動し、樹上に登り、枝の上を移動した(図9-22)。



図17: 狒猿の展示 (熊本市動植物園)



図20: シイタケ栽培の榎木と薪 (熊本市動植物園)



図18: 動物除け柵で囲まれた村の展示 (熊本市動植物園)



図21: 農家の納屋からサルを眺める (熊本市動植物園)



図19: サル除けのバケツ (熊本市動植物園)



図22: 棚田 (熊本市動植物園)

3. 飯田市動物園の新たな展示

1) 展示の考え方

昭和28年に開園された飯田市動物園は昭和59年以来、37年ぶりに再整備する計画を予定していた。私はかねてから、扇状台地にあり南アルプスを遠望できる飯田市動物園については、その立地を活用して劇的に生まれ変わらせることのできる可能性を確信していた。私は2011年3月に同園を訪れ、長良健次園長に計画案をたずねると、再計画の対象は決まっているが、その内容は未定であるという。また、フンボルトペンギンのエリアから始め、受託事業者の建築設計会社が勉強のために、各地のペンギンの展示を見学に行っているところであるということであった。私は現在の敷地でフンボルトペンギンの水中での遊泳を促し、生息地にできるだけ近い環境で展示するための案を描き(図23)、翌月に持参して説明した。市の職員も交えた打ち合わせで、その案で進めようということになった。

市の担当者に若い今村光弘技師が加わった頃、私は飯田市動物園の立地の可能性を話し、現在の園の敷地は南アルプスの眺望を眺めることができるのに、それが活かされていないこと、特にニホンカモシカやニホンジカは崖側から柵越しに眺めるようになっているが、これでは街の建物を眺めるだけで価値がなく、崖側にニホンカモシカを配し、柵ではなく堀で仕切り岩場にニホンカモシカを登らせれば、実際の生息地である

南アルプスを背景にした、世界的にも価値のある独創的な展示ができることを話した。そして、そのことが具体的にわかる園全体の改修後の平面図(図24)と断面図を描いた(図25)。現在、ニホンカモシカの手前にはニホンザルのサル山が配されている。ニホンカモシカの岩場を改修したのち、このニホンザルのサル山のモート部分を掘り下げてガラスにし、岩山を土の築山にして樹木や倒木を配してやれば、ガラス越しに間近に枝をわたるニホンザルを眺め、さらにその奥に岩場のニホンカモシカを見て、遠方の南アルプスを眺望するということが可能になる。いわば、展示のトリプルループである。

飯田市は人形劇のまちである。8月第一週の週末には全国から演じ手が集まり、飯田のまちは、人形劇一色につつまれるのだという。私はこのまちなことを知らなければ、中心市街地であるリンゴ並木の南端の崖沿いにある動物園の計画案をかたる資格はないと思った。この年の8月5日から6日にかけて飯田市の人形劇を見て回った。あらゆる施設で人形劇が行われて人々がくりだし、飯田市は本当に人形劇のまちであった。

2) 施工にむけて

翌、2012年になり、今村技師らの努力により、私は設計と施工への位置づけをいただくことになった。飯田市動物園は、私が提案したアルプスを背景にしたニホンカモシカの岩場を

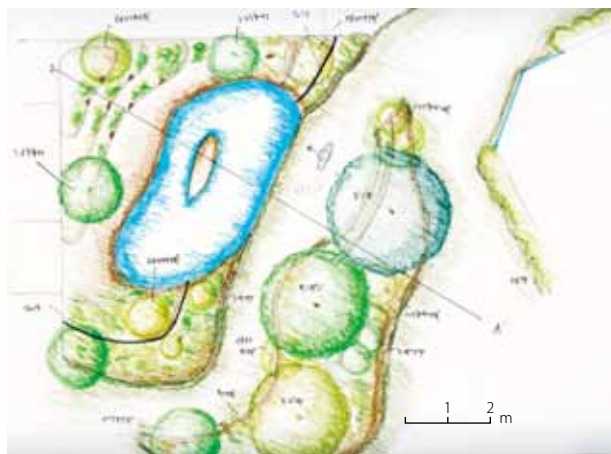


図23: フンボルトペンギンの平面提案図 (飯田市動物園)



図24: 飯田市動物園の全体提案平面図

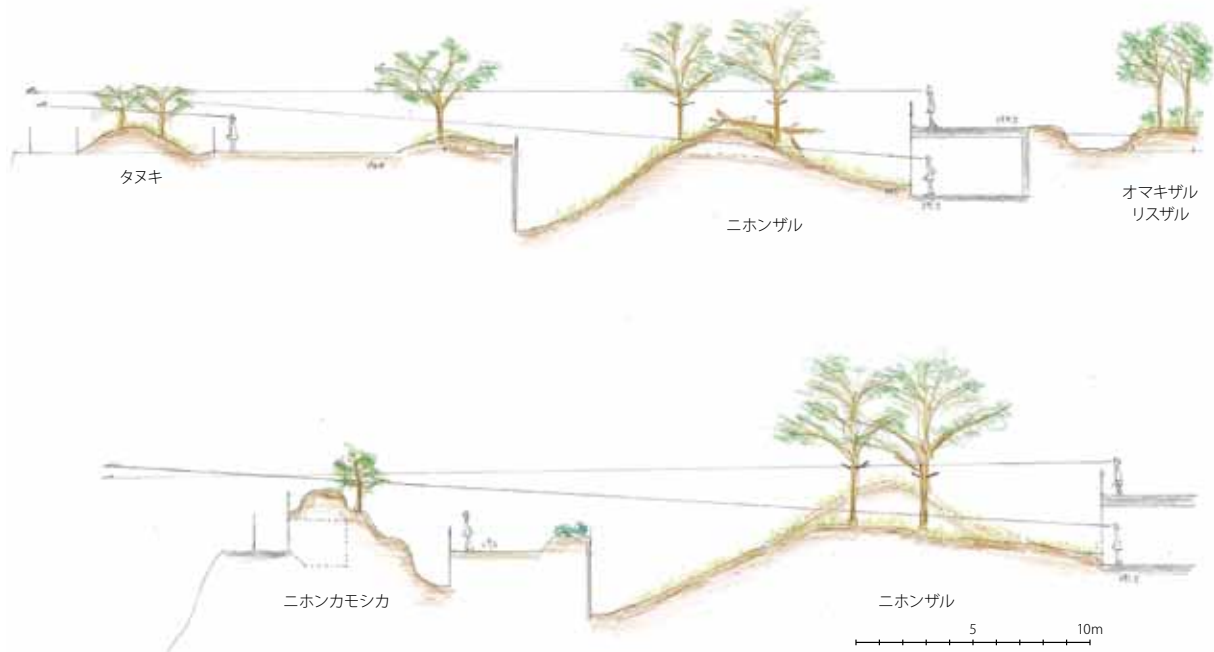


図25：ニホンカモシカとニホンザルの通景断面図（飯田市動物園）

中心とする計画案をもとに改修が進められることになった。私はかねてから、現地調査の必要性を述べており、6月18日、私たちは今村技師、平井隆志技師、熊谷健太郎技師らの建築職員、そして動物園の飼育担当職員らとともに、南アルプスへの現地調査に出向いた。そして翌19日から私はすでに事業計画が決まっているフンボルトペンギンからはじまり、アンデスコンドル、ニホンカモシカ、ニホンジカなどの展示の設計と施工監理にかかわることになった。次の事業であるニホンザルとの通景の予算の獲得を可能にすることは、これらの展示の成果次第なのである。

飯田市動物園の設計費用は、リンゴ並木の中心市街地活性化事業の一部という費用であり、決して潤沢な費用ではない。今村技師は設計会社に発注する費用がないので、実施設計は職員で行うという。実際に私が描いた計画図をもとに平井技師が実施設計の図を描いた。また、乏しい費用の配分について、園長は事務所棟に費用をかけず、展示に費用を

配分してほしいと語る。私はこれらの態度に大きく心を動かされた。

3)フンボルトペンギンの丘

7月からフンボルトペンギンの展示の工事がはじまった。水深1.7mで幅5m、奥行き2.5mのプールの奥には奥行き3mの傾斜地がある。観客はペンギンが水中を泳ぐ姿を視線の高さで眺め、さらにその上の傾斜地をあるく姿を眺めるようにしている。飼育担当者の鈴木球代氏と協議し、傾斜地は岩で土止めをし、芝と地被植物を配して、奥の岩場に四つの巣穴を設けている。プールの水槽の側面の色彩は、ベージュにし水面付近だけに擬岩処理をして、底はさらに明るい色彩にしている。実際に水を入れてみると、ベージュではなく明るい水色になった。水槽を濃い水色に塗るとプールは不自然な色になる。この色は有効であったので、熊本市のペンギンのプールでも活用することにした。



図26: フンボルトペンギンの丘 (飯田市動物園)



図27: アンデスコンドルの岩山 (飯田市動物園)

8月5日、「フンボルトペンギンの丘」はオープンし、ペンギンたちが、水中をいきおいよく泳ぐ姿を間近に眺め、また陸の上を歩く姿を視線の高さで観察できるようになった。午前中には活発な行動がみられ、時にはペンギンが水の上を飛んで泳ぐ姿もみることができる(図26)。

フンボルトペンギンの丘は人気の展示になった。

4) アンデスコンドルの岩山

アンデスコンドルはこれまで、小さなケージに収容されていたが、水禽を別棟に移し、水禽が飼育されていた大きなケージで岩場からの飛翔を見せようという飼育担当者の三才福子氏の考え方で、9月から設計と工事が進められた。

高さ4mの塔をつくり岩を登りながらアンデスコンドルがその上にたどりつくようにして、斜め上から対角線状に観客側に飛翔するような構造にした。観客から眺める位置は、地面を60cm上げ、さらに厚さ40cm程度の岩を配して観客の目線に近い高さで観察できるようにしており、ケージの中の地面は起伏をつくり、さらに倒木を配するなどの変化をもたせている。また、人止め柵は植栽で隠し、奥の風景との一体感を図っている。

完成後、数週間をへてアンデスコンドルは見事に岩山から飛び立った。アンデスコンドルは敷地内をよく動き、とりわけ起伏の高い地面の上でよく翼を広げて休む(図27)。

5) 南アルプスに生きる:カモシカの岩場

12月になり、ニホンカモシカとニホンジカの工事が進められた。この工事では、崖側に岩場をつくり、アルプスの山麓に見えるまちの姿を岩場で隠して、岩場の奥に南アルプスの山脈が見えるようにしなければならない。さらに将来は、ニホンザルのサル山のガラス張にした擁壁の下部からも、ニホンカモシカが見えるようにしなければならない。アルプスの見える崖側には、岩組をささえるコンクリートの重力擁壁の高さの位置だしをするロープを張り、山脈が見えてまちを隠す高さ決めを行った。

擁壁が完成し、堀の掘削を終えた3月14日から16日にか



図28: カモシカの岩場。断面の構造がわかる (飯田市動物園)



図29:カモシカの岩場。奥に南アルプスを望む（飯田市動物園）



図31:カモシカの岩場（飯田市動物園）

けて、高さ2.5m、幅15mのコンクリート擁壁に岩を積み上げる作業を行った。岩はアルプス山麓から今村技師らが選び、トラックで運んでこられた。岩の大きさは2mをこえるものから50cm程度のものでさまざまである。岩組みは景をつくるだけでなく、ニホンカモシカが登ることができるような道筋をつくる作業でもある。

また岩の上には、ニホンカモシカが滞留しやすいように平坦にしておく必要がある。私は変化のある多くの岩を前に、これら用としての役割と人々の心に刻まれる景としての岩組みの配置を考えながら、一つ一つの岩と対話しながら、作業をすすめた。市の職員は造園業者とともに岩場で岩の配置の作業

につかれた。ニホンカモシカの寝室は擁壁の奥にあり、観客の視界からは隠されている(図28)。

岩組みを終えた4月には、天端の高さを調整するための擬岩や堀の擁壁の擬岩化の作業を行った。ビューポイントは数ヶ所にわたり、それぞれの地盤高と奥の山脈の高さが異なるため、天端の高さの調整は困難をきわめた。

次は植栽工事であり、岩場の手前にはカモシカの緑陰を確保するために、飼育担当の前裕治氏と協議し、コナラとクヌギの高木を配し、堀下の土にはチシマザサやチガヤ等の草本を配した。これらの植栽は、市の敷地から移植して行われた。

ニホンカモシカに隣接してニホンジカの展示を設けた。シカ



図30:カモシカの岩場の全体（飯田市動物園）



図32:シカの草地（飯田市動物園）

の展示は、観客の園路から70cm程、地盤をあげ、背景に南アルプスを仰ぎながら、見上げでニホンジカを観察できるようにした。ニホンジカの寝室は展示場の左手に配し、杉板を横張した化粧で、農家を思わせる建物とした。

ニホンカモシカの岩場とニホンジカの展示は、5月4日に公開されることが決まった。これらの展示の名称は、「南アルプスに生きるカモシカの岩場、シカの草地」とした。展示されている動物は、実際の生息地の南アルプスで岩場や草地などそれぞれの場で生きており、奥に実際の生息地を眺めながら、この展示を見ることができる。そして、それを見る観客の多くも飯田市に生きている。展示を通じてさまざまな環境で生きることを考えてほしいという思いからである。

公開に先立ち、4月29日にメディア用の内覧会をすることにした。29日の朝、ニホンカモシカはみごとに岩山の頂上に登り、アルプスを背景にしたその雄姿を多くの記者やテレビカメラの前に見せてくれた(図29-32)。その様子はNHKテレビ、長野放送、SBC、飯田ケーブルテレビ等の他、中日新聞、毎日新聞、読売新聞、信濃毎日新聞、朝日新聞、南信州新聞などの多くのメディアで紹介された。メディアでの報道が功を奏したのか、5月4日のオープニングには、多くの観客が訪れた。

4. おわりに

熊本市動植物園のニホンザルの展示と飯田市動物園のニホンカモシカの展示は、動物の生息環境というこれまでの展示対象からふみこみ、野生動物の生息地の地域環境を展示するものである。これらの展示、とりわけ熊本市動植物園のニホンザルの展示の創案を経て、わが国での生息環境展示を具体化するための展望をえた。

熊本県相良村のニホンザルの生息地はツブラジイの優占する照葉樹林である。同じ九州における生息地でも宮崎県幸島は島嶼であり、植生は異なる。鹿児島県南部の屋久島では亜種のヤクザルとなり、その植生景観は亜熱帯林となる。同じ九州地域においても植生の変化による景観の違いがあり、

本州の東北地方に移ると植生は、落葉樹林のブナ帯へと大きく変化し、下北のニホンザルでは毛も長く躯体も大きくなる。

亜熱帯からブナ帯までをおおうわが国の植生は、大きく異なっており、植生に依存する野生動物の生息環境も異なることになる。その地域に生息する野生動物を植生と立地環境に着目して再現した展示を行うためには、異なる景観を表現することが必要になる。このような環境の相違に着目し、それらを再現することで、それぞれの地域環境を創出する展示が可能になる。植生の再現から生息環境展示の精度をあげることは、動物の理解から地域環境の認識につながるものである。

熊本市動植物園のニホンザルの展示では、横枝の張った樹木や倒木をふんだんに配することで、樹上での滞留時間が長くなり、地被に接する頻度が減少する傾向がみられた。今後、展示において、植物が被害を受けることがないか、展示の様子を見守りながら継続して観察する必要がある。

文献及び註

- (1) 若生謙二、2000、天王寺動物園サバンナゾーンとランドスケープ・イメージ、大阪芸術大学紀要藝術
- (2) 若生謙二、2006、天王寺動物園アジアの森、大阪芸術大学紀要藝術
- (3) 若生謙二、2008、天王寺動物園サバンナ肉食動物ゾーンとアニマル・エコアート、大阪芸術大学紀要藝術
- (4) 若生謙二、2010、横浜市よこはま動物園ズーラシアに「チンパンジーの森」をつくる、大阪芸術大学紀要藝術 32, pp.97-112
- (5) 若生謙二、2010、長野市茶臼山動物園に「レッサーパンダの森」をつくる、大阪芸術大学紀要藝術 33, pp.135-143
- (6) 若生謙二、2010、動物園革命、岩波書店